

## 特集「ジャーナリズム論を探る」

## ジャーナリズムとはなにか

和田 洋一

## 1 刊行された三つの「講座」

最初に、一九七三年から七四年にかけて、時事通信社が刊行した『講座・現代ジャーナリズム』をとりあげる。I「歴史」、II「新聞」、III「放送」、IV「出版」、V「広告・大衆文化」、VI「ジャーナリスト」の六巻からなり、各巻頭にはそれぞれ同文の「刊行のことば」が掲げられていた。筆者はおそらく編集代表者城戸又一（敬称略）だったのである。「刊行のことば」は、現代日本ジャーナリズムへの憂慮と、手きびしい批判とを表明した明快な文章であった。

次に、これより更にふたむかし前に、河出書房から刊行された『マス・コミュニケーション講座』全六巻については、ひとこと触れるだけにとどめる。時事通信社の人たち、編集委員の

人たちは、河出の講座を回想しながら、自分たちの新しい講座の企劃をたてたのであろうと思われるが、敗戦直後アメリカから輸入された「マス・コミュニケーション」の理論は確かに日本人を惹きつけた。それは一時流行語となり、そのうちに略語「マスコミ」が生まれた。「マスコミ」はひろく普及し、大衆用語となり、もとの意味から転じて「マス・メディア」の意味に使われるようになった頃には「マス・コミュニケーション」というものことばは、ほとんど人の口にはのぼらない状況になってしまっていた。

マスコミという略語には「安っぽさ」がともなっているといふこともあった。時事通信社は『講座・マスコミ』を刊行することはなかったと思われるが、一時、流行語マス・コミュニケーションに圧倒されかかっていた「ジャーナリズム」という古

いことばに新しい精神を吹きこもう、ジャーナリストの諸君に責任の重さを自覚してもらおう、ジャーナリストの奮起を促がそうという願いをこめて『講座・現代ジャーナリズム』は刊行されたとわたしは信じている。「刊行のことば」は次のようなドクリとさせる調子ではじまっている。

「ジャーナリズムに対する疑惑がひろがっている。

ジャーナリズムはまた、いつか来た道を歩みはじめているのではないか。

権力と癒着して、読者、視聴者である人民大衆をだます側に加担しはじめているのではないか。」

そしておしまいの方には次のようなことばが現われる。

「権力におし流され、抵抗を忘れ、批判を棄てたジャーナリズム——それはマスコミであってもジャーナリズムではない。」

わたしは、現代日本ジャーナリズムへの憂慮と批判にかんじて共感をおぼえ、執筆者陣に参加したが、しかしジャーナリズム一般にかんじてわたしは「崇高な」イメージなどもっていないかったので、一〇〇%の共感ということにはならなかった。権力におし流され、抵抗を忘れ、批判を棄てた過去のジャーナリズムを、わたしはからだで知っていたからである。わたしは大正デモクラシー、大正リベラリズムの空気の中で学生時代を送った。満州事変、上海事変のときの日本ジャーナリズムの軍部へのふがいない迎合は、忘れようにも忘れられない。わたしは当時のくやしきをもとにして『講座・現代ジャーナリズム』

「歴史」に原稿をよせ、小見出しとして「大正デモクラシーを放棄」、「無気力化したジャーナリズム」などを使用した。

一五年戦争の後半期に、わたしは三年と五カ月、新聞記者をつとめたが、その直前の一年半、身体を拘束されていたということがあって、執行猶予の身の上だったので、抵抗精神を発揮できるはずもなかった。日本中のジャーナリズムが権力におし流されていく姿を、じいっと見ているだけであった。敗戦後の新聞労働組合の分裂また分裂の姿、アメリカ占領軍によるレッド・パージ、どうしようもなくクビを切られていったジャーナリストたちの顔が今、目の前にうかんでくる。ジャーナリズムを高く評価し、マスコミを低く評価するということは、わたしにはできそうもない。もっとも、ジャーナリストに対してジャーナリストとしての誇りをもって、しっかりとたたかってくれと訴えかけている「刊行のことば」の気持だけは判っているつもりであった。

一九三〇（昭和五）年一〇月から刊行されはじめた内外社の『総合ジャーナリズム講座』全一二巻は、わたしにとって第三の『講座』である。第一巻に巻頭論文を書いた長谷川如是閑は、ジャーナリズムという言葉は「半ば侮蔑的の言葉である」と断定し、ジャーナリズムが軽蔑されるのは、「新聞記者の無学であることや、記載の不正確なことや、認識の科学的でないことや、考え方の哲学的でないことや、表現の芸術的でないことや、（中略）衆愚に媚びることや、徒らに雷同的または反発

的であることや、事大主義であることや、流行主義であることや、等々々々を人びとは理由に挙げる」とも書いている。ジャーナリズムという名詞、ジャーナリスティックという形容詞を半ば軽蔑の言葉として受けとっていたのは、何も如是閑だけではなく、世間一般がそうだったのである。ジャーナリズム、ジャーナリストの評価は、戦前とくらべれば戦後はいくらかあがったことは確かであり、安っぽいマスコミにくらべれば、ジャーナリズムの方が比較的尊敬を受けやすいことも認めていい。

長谷川如是閑は、先にのべたように『総合ジャーナリズム講座』第一巻の巻頭論文を依頼された。そして「ブルジョア・ジャーナリズム」と題する論文を寄稿した。出版社である内外社も、編集兼発行人である橋篤郎も、名前は知られていなかったが、事実上の編集者は千葉亀雄と大宅壮一で、いずれも名士といえど名士であった。大宅はそのころ三〇歳になるかならないかの若さであったが、左翼がかつた文芸評論家、社会評論家として知られていた。京大の学友会は年に二、三度「名士講演会」を行ない、大山郁夫、永井柳太郎、中野重治、大宅壮一を講演者として迎えたことがある。京大の学生であったわたしは大宅壮一の顔をそのとき見たのであるが、当時の彼は二八歳だったはずである。千葉亀雄はかつて大新聞の大幹部であったしジャーナリズム研究者として知られ、『総合ジャーナリズム講座』創刊のときは立教大学教授の肩書をもっていた。

如是閑の原稿は、二人の編集者をつかりさせたものではある

まいか。本来なら編集者が没にするか、大はばの書き直しを要求するか、すべきものであったが、如是閑は当時日本最高の評論家であり、ジャーナリズムの権威者だったので、締切りまぎわに巻頭論文の原稿を没にしては第一巻の発行がひどくおくれるということ、そのまま採用したのであろうとわたしは推測する。如是閑は、新聞、新聞紙、新聞社、新聞記者、商品新聞、独立新聞のことばかり書いていて、ジャーナリズムとは何か、ブルジョア・ジャーナリズムの特質は何かについて、さっぱり力を入れていなかったのである。

『総合ジャーナリズム講座』は、新聞ジャーナリズム、雑誌ジャーナリズム、出版ジャーナリズムの三つを総合する予定だったのであるが、如是閑はそのことも理解していなかった。理解させていなかった出版社に責任はあったのかもしれないが、如是閑は「ブルジョア・ジャーナリズム」を論じる前に順序として「ジャーナリズム」とは何か、を論ずべきであったし、ジャーナリズムは日本人にとっては外来語なのであるから、語源についても、ひと通りの説明はすべきだったのである。如是閑は「ブルジョア・ジャーナリズム論」を書く機会に、ジャーナリズムの語源の勉強を本気でしておれば、彼のジャーナリズム論も、もうすこしまともなものになったはずだとわたしは思う。

## 2 日記と日刊紙

ドイツ新聞学の父と呼ばれ、経済史家でもあったカール・ピ

ユーヒャー Karl Bicher の論文「新聞業の起源」は、一九一七(大正六)年に日本語に翻訳された。それ以後、日本の新聞研究者、ジャーナリズム研究者は、新聞の起源、ジャーナリズムの起源について語ろうとするとき、しばしばユーヒャーの論文を手がかりにしたが、ユーヒャーから学ぶのが精いっぱいであった。

わたしも、外来語としてのジャーナリズムの語源を徹底的に調べるだけの時間をもちあわせず、ユーヒャー以外は、古代ローマの研究者である友人、「ジャーナリズムの思想」について書いた友人、百科辞典、ラテン語辞典などのお世話になったに過ぎない。わたしの知識は浅い。ジャーナリズムは、古代バビロニアではじまった、という説を最近ちらっと教えてくれた友人もいるが、これはもうすこしくわしく話をきかないとどうにもならない。

ユーヒャーは、ユリウス・カエサルが創設した「アクタ・デイウルナ・ポプリ・ローマーニ」*Acta diurna Populi Romani* までさかのぼって、新聞の起源を論じているのであるが、わたしとしては「デイウルナ」というラテン語の形容詞、*Jurnal Journal* というフランス語の名詞、それを英語よみにした「ジャーナル」、そして「ジュルナリズム」、「ジャーナリズム」そのあたりの関係を探ってみただけである。

「ポプリ・ローマーニ」を先に片づけようとする「ローマの住民の」か、それとも「ローマの民衆(人民)の」かという

問題にまずぶつかる。「住民」ととれば、首都ローマに居住している支配階級、被支配階級のすべてを含むことになり、「民衆」(人民)ととれば支配階級ははぶかれることになる。ユーヒャーは、ポプリ(原形はポプルス)を「住民」*Bewohner* と訳しており、わたしもそれでいいのだろうと思っている。

次に、デイウルナ(原形はデイウルヌス)は、英語のデイリー *daily* にあたる形容詞で、「毎日の」と訳すか、「日常の」「その日その日の」と訳すかによって、意味は多少ちがってくる。アクタは「行動」、「行ない」という意味のほかに、「記録」「法令」「条令」などの意味をもっている。ラテン語の辞書では「アクタ・デイウルナ・ポプリ・ローマーニ」は「ローマで毎日発表された一種の官報」*a kind of official gazette published daily in Rome* ということになっている。

この「一種の官報」は、紀元前五七年(カエサルが暗殺されるより一三年前)から紀元三三〇年(コンスタンチヌス大帝がローマからイスタンブールに移った年)までつづいたというのであるから、発表の形式にさまざまな変遷はあったにちがいない。現在、学校当局が学生一般に対して、このことは是非知らさねばならぬとか、知らせておいた方がいいだろうと判断した事項を文章化して、「揭示」の形で学内の一定の場所にはりつける。この「揭示」が数日間放置されたままになっていることはむしろ普通で、毎日毎日新しい「揭示」がはり出されるわけではないが、学園の日常生活に関係のある事ながらが学生に知

らされ、公開であるから学生は自由に閲読することができる。そういう施設をカエサルは紀元前に考えだしたのであって、現在の学校当局のだけれど、白い紙の上に筆で文字を書くのとはちがって、カエサルの時代は、板の上に石膏を塗布してその上に文字を刻んだらしく思われる。

カエサルは、紀元前、ガリア地方（今のフランス）を征服した結果として、ラテン語が住民のあいだに浸透し、ラテン語を語源とするフランス語がぞくぞく生まれることになった。ディウルナ、ディウルヌスからは「ジュルナル」Journal が生まれた。フランス語の「ジュルナル」は「日記」と「日刊紙」と二つの意味をもっていること、アングロサクソン系の人は、日記のことを「ダイアリー」といったり、「ジャーナル」といったりしていることは広く知られている。ジャーナルは、フランス語の Journal の英語よみである。

毎日毎日の出来事、毎日毎日の感想を日記帳に書きつける、記録する。公開はしない、家族のもの、親友にも見せない場合がある。これが日記の特徴である。「アクタ・ディウルナ」にかんしては、石膏の上に刻まれた文字はやがて消滅するであろうから、記録性はないと見なしていいだろう。一方、公開性は「アクタ・ディウルナ」の特徴であった。

フランス語の「ジュルナル」は、「私的な」「秘密の」「内緒の」記録としての「日記」を意味すると共に、他方「公開的な」「不特定多数の読者を相手にする」、「その日その日の締切

りに追われる」日刊新聞をも意味することになった。一八世紀に新しく出現した「ジュルナリズム」、「ジャーナリズム」ということばは、日刊紙の特徴を現わしているイズムであって、日記のイズムではない。

地球物理学者で、名随筆家でもあった寺田寅彦は、かつてジャーナリズムを「その日その日主義」と呼んだことがある。きょうはきょうの事件を熱心に追ひ、明日は別の事件を熱心に追ひかけ、昨日のことは忘れてしまっている。きょうときのうとのあいだに何の因果関係も見出さない。夕方、締切りにまに合うように原稿を呈出すれば、それで一日はおわり、そういう生活そういう仕事を「その日その日主義」と呼んだのであるが、「その日その日主義」という点では日記も同じである。ちがっているのは、公開主義と秘密主義、不特定多数の読者と特定小限の読者、締切り時間のあるなし、締切り時間のために日刊紙は拙速主義におちいらざるをえないが、日記の筆者は気まままが許されることなどであって、ジャーナリズム、ジュルナリズムということばは、日記を無視してつくり出され、拙速主義のために軽蔑されながらしだいに大きく育っていった魔物、その現象、その生き方を意味するようになった。

ライバル相互間の露骨な競争で軽蔑される、記者の「無学大胆」で軽蔑されるということもあったが、軽蔑されているばかりではなかった。先にのべたように、一九三〇年には「綜合デジャーナリズム」全一二巻が出たということは、ジャーナリズム

がなかば軽蔑され、なかば怖れられ、もしくは親しまれ、もしくは敬意を表されていたからこそであった。『総合ジャーナリズム講座』の中のウエイトは、新聞ジャーナリズム6、雑誌ジャーナリズム3、出版ジャーナリズム1ぐらいの割合であった。

放送ジャーナリズムはゼロであったが、それはペンをもって仕事をするのがジャーナリストであるという偏見、固定観念にもとづくものであって、語源上の根拠は何もなかったのである。一九三〇年の如是閑は、「ブルジョア・ジャーナリズム」の原稿をたのまれて、新聞のことばかり書き、「本来の新聞」ということばを乱発し、不偏不党の新聞、商業的新聞は「本来の新聞」ではないと説き、放送ジャーナリズムをろくすっぽ問題としなかったが、一九六〇年には平気な顔をして「放送ジャーナリズム」論を書いている。

次に、中世のドイツには「遍歴ジャーナリスト」と呼ばれる旅芸人が存在していた。清水幾太郎は岩波新書の『ジャーナリズム』（一九四九年刊）の中で、「あの村からこの村へと、山を越え、川を渡って、行く先々で節廻し面白く、世相の姿を歌って聞かせる「遍歴ジャーナリスト」のことを紹介している。しかし、「ジャーナリズムとは何か」と自問したときの清水の答えは「新聞や雑誌のごとき定期刊行物によって果されている社会的活動を中心としてジャーナリズムということを考えればよい。」であって、放送ジャーナリズムは彼の念頭にはなかった

のである。遍歴ジャーナリストについても彼は気まぐれで語ったに過ぎないのである。しかしジャーナリズムの語源からいえば、ニュースを、文字を読んで知ろうと、耳で聞いて知ろうとそれはどうでもいいことである。英語のニュースを日本人のために「新聞」と訳した人はことによると、ニュースとは耳で聞くものと思ひこんでいたかもしれない。

### 3 日本新聞学会

日本新聞学会という名称には、はじめから疑義があった。日本新聞学会が創立されたのは一九五一（昭和二六）年六月であったが、創立のために骨を折った人びとは、東大新聞研究所長小野秀雄をはじめ、大部分は元新聞記者であり、小山栄三のように大学で新聞学の勉強をした人、日本新聞協会のメンバーなども加わったが、雑誌畑、放送畑の人はゼロに近かったのではなかったかと思う。

しかしアメリカ占領軍は、世論操作の手段として放送が新聞と同じぐらい有力であると見なしていた。アメリカから輸入されてきた新しいマス・コミュニケーション理論は、新聞・放送・雑誌・映画のいずれをも重要視していた。日本新聞学会の創立者たちも、放送・雑誌の研究者がぞくぞく入会してくれることを願っていた。そうだとすると日本新聞学会という名称は好ましくないということになる。「日本マス・コミュニケーション学会」はなが過ぎるというだけでなく、学会名は漢字が望

ましいという意見は当然強かった。発起人会だったか仮理事会だったか、そういう種類の会合で話し合いをし、結論を出そうということになった。わたしは京都に住んでいたが、発起人でもあり仮理事でもあったので、東京で開かれた会合に出席した。出席者は二〇名を越え、今は故人である小野秀雄、小山栄三、長谷川了、内野茂樹などの顔もみえた。

学会の名称を「日本新聞学会」に決めてしまうと、ニューズペーパーだけを研究する団体のようにとられ、放送局の人、雑誌の研究者は入会をためらうことになるだろう、何か適当な名称はないものかとみんなで知恵をしぼった。

「日本ジャーナリズム学会」を提案する人がひとりもなかったのは、今から考えると不思議な時代であったが、当時はマス・コミュニケーションが流行語になりかかっていた、古いことばであるジャーナリズムは影がうすかったということ、もう一つは片仮名書きは学会の権威にかかわるといふ気持が出席者にあつたためであろう。

マス・コミュニケーションの訳語として「大衆伝達」が時々使用されてはいた。しかしマスが大衆と訳すことが果して適当なのか、群衆はどうなのか、大量、一枚岩はという疑問があり、コミュニケーションにいたっては、いよいよ難かしく、伝達、通信、通知、連絡、交通みんだめということだった。中国から報学を借りてきて「日本報学会」はどうかという提案があつたが、「ほうがくかい」を耳できくと、三味線・琴・尺

八の会とまちがえる人が出てくるという意見が出て、これもだめ。ドイツ語の *geistiger Verkehr* の訳語「精神交通学会」も苦笑をよび起しただけ。「日本新聞・放送・雑誌学会」も賛成をえられず、結局、まあ仕方がない、「日本新聞学会でいくか」ということになった。名称は仕方がないとして、学会規約で、新聞だけを研究・調査する学会ではないことを明記すればいいという発言があり、規約第三条で、「本会はジャーナリズムに関する研究、調査ならびにその研究者相互の協力を促進し……」とうたわれた。

小山栄三は「日本新聞学会」の新聞は、ニューズペーパーではなくニューズの意味であり、ニューズ報道、ニューズ解説も含むという風に考えたらしい」とさいごに発言し、わたしは内心同じ意見だった。

ジャーナリズムは学会の名称としては採用されなかったが、学会の規約の中で生かされた。学会の機関誌である『新聞学評論』の創刊号には、小野会長の「創刊の辞」が掲載されているが、会長はの中で、アメリカでは最近、マス・コミュニケーションという用語が次つきと使用されるようになってきた、と書き、そのあとに「過去のジャーナリズム」(傍点和田)などと記している。学会機関誌『新聞学評論』のサブタイトルとしては、創刊号いらい今日まで「マス・コミュニケーションの総合研究」が採用されている。

学会規約は創立後一二年目に改訂され、「本学会は新聞・放

送・映画・雑誌等ジャーナリズムおよびマス・コミュニケーションに関する研究、調査ならびにその研究者相互の協力を促進し、……」となった。学会の英文名もその機会に改められ「The Japan Society for Studies in Journalism and Mass Communication」となった。それまでの for journalistic Studies に対しては、クビをかしげる人が多かったのではないか。日本の新聞研究者は「新聞」を英訳するときにはまず Journalism を思い浮かべ、Journalism を邦訳するときにはまず「新聞」を思い浮かべる習慣が二〇世紀のはじめからできてしまった。ところが二〇世紀の中ごろから、マス・コミュニケーションが流行語となり、日本新聞学会の「マス・コミュニケーション時代」もしばらくつづいたが、しかしながくはつづかなかった。『新聞学評論』第18号は「ジャーナリズム論の再検討」特集号になっており、特集号編集の実質上の代表者推進者であった山本明は、巻頭のことわり書きの中で次のように書いている。

「この号がジャーナリズム論特集であることに、いささかともどいの感をもつ読者もおられることだろう。(中略)学会としてジャーナリズム論を対象にしたことは、これがはじめてなのだから。」

特集号を企画した理由として山本明は「まず第一に、アメリカ渡来のマス・コミュニケーション理論が先細り状態にあることだ。主として効果論をその分野としてきたアメリカ流マス・コミュニケーション論は、ロジャース以後みるべき成果をあげ

ておらず、それは日本に大きく影響している」と指摘し、現在を「下降の季節」として捉え、「マス・コミュニケーション論をすてるのではなしに、ジャーナリズム論による刺激という意識が、この特集に働いている。」とのべている。

大正のおわり、昭和のはじめに青春期を送ったわたしは、日本の学者、大学教授がドイツの学者、大学教授に頭があがらなかったこと、ドイツの学説を得意になって紹介するけれども、批判しなかったことなどを覚えていて。河上肇大先生もドイツのカール・マルクスには頭があがらなかったことを知っている。敗戦後、日本の研究者にとってドイツがアメリカに変わり、アメリカのマス・コミュニケーション論の調子がよければ追従し、向うが先細り状態になれば、こちらも先細り状態になるとは、いかにも情ない、とわたしも思うだけは思った。マス・コミュニケーションの略語マスコミの普及、大衆化とともに、コミュニケーションという捉え方が失なわれていきそうでもあったが、事実、日本のマスコミュニケーション論は衰退の時代に入り、日本新聞学会はジャーナリズム時代に入るのではなく、コミュニケーション時代に入ってしまった。特集号の出た年、一九六九年の六月には「ジャーナリズム論の再検討」をテーマにしたシンポジウムが関西大学で行なわれたということはあったが、山本明を含めて一九六九年の学会研究委員会の努力がじゅうぶんに実を結んだとは思われない。

今回の『新聞学評論』のジャーナリズム特集の企ては、やは

り日本新聞学会の活性化を目指しての試みであると思う。わたしは自分の無力を自覚しながら、何らかの寄与をしたいと思いますと思ってここまで書いてきた。

#### 4 「下降の季節」からの脱出

ジャーナリズムとは何か、を明らかにするためには、ジャーナリズムと全く正反対と思われるものを選んで、ジャーナリズムの横におき、両方を丁寧に見くらべるという方法がある。

ジャーナリズムと正反対のものはアカデミーであると言いだしたのは哲学者戸坂潤であって、彼は一九三一（昭和六）年に「アカデミーとジャーナリズム」という題の論文を書いて多くの人の支持を受け、敗戦後にいたつても、ジャーナリズムとアカデミーとを全く異質のもの、対立物として捉える考え方は消えなかった。戸坂は最初「アカデミーとジャーナリズム」という題で岩波のアカデミックな月刊誌『思想』に掲載したのであるけれど、読者の方が「アカデミズム」という英語の辞書になんぞ字をつくりあげ、「アカデミズムとジャーナリズム」を対立概念として使用したので、戸坂が負けてしまつて「アカデミー」を放棄し、「アカデミズムとジャーナリズム」と書くようになったといういきさつがある。といってわたし自身には当初の論文を読んだ体験があり、アカデミーは場所の概念、特殊地域の概念であつて、アカデミズムとは意味が同じではないと考えているので、アカデミーを簡単に放棄することはできない。

戸坂潤が京大哲学科に入学したのは一九二三（大正一二）年四月で、わたしは四年おくらせて文学科に入学した。哲学科の研究室に何の用事があつたのか思い出せないが、わたしは一人で木造の建物の二階へあがつていった。研究室のとびらには名札がかかつていて、西田幾多郎、田辺元というような偉い先生の名前があつたので、わたしはかすかに緊張したような記憶がある。廊下の壁にはギリシャの哲学者をはじめとして西欧の著名な哲学者の額がずらつとかけられていた。あたりはしいんと静まりかえつていて、ことりという音もなかった。文学科の学生であつたわたしは、そのとき哲学科研究室の威厳と静寂さとを同時に感じたのであるが、それから数年のち、戸坂の論文「アカデミーとジャーナリズム」を読み、戸坂の「アカデミー」の場合は、プラトンがアテナイに設けた学園アカデメイアと、京大哲学科のあの木造建ての二階のイメージがおそらくオーバーラップしているのだろうと思つた。

哲学に、そして哲人にあこがれを感じていた東京の一高の若者たち、三木清、谷川徹三、久保正夫、戸坂潤、樺俊雄、梯明秀など、名前をあげればきりがながい、東大をしり目にかけて京大の哲学科にやって来たのはなぜだったのか。戸坂は三年間の学生生活をおえると、大学院に籍をおき、京都高等工芸学校同志社女専、大谷大学、神戸商科大学などで哲学の講師をつとめた。しかし戸坂にとってアカデミーは、これらの学校ではなくて、やはり京都帝国大学の哲学科の建て物、哲学科の教授た

ち、同輩たちがつくり出す雰囲気であったにちがいない。毎週行なわれた田辺教授対戸坂潤の討論の激しさについては、同席した後輩たちが書きのこしてくれている。

戸坂がアカデミーに安住せず、東京へ移ったのは、彼の思想の左翼化と関係があった。一九二八年には河上肇が京大を追放され、時を同じうして九州帝国大学や東京帝国大学の左翼的教授、助教授がぞくぞく追放され、「大学の顛落」が叫ばれるようになり、マルクス主義に傾いた戸坂は京大の助教授、教授への就任を断念せざるをえなかった。

アカデミーの任人になることを断念するとすれば、あとは雑誌ジャーナリズムからの原稿料と出版ジャーナリズムからの印税をあてにして生計をたてる以外に道はない。大新聞社は左翼がかつた学者への原稿依頼は差しひかえた。東大講師だった夏目漱石は二〇年、三〇年、おとなしく辛抱しておれば勅任官教授になれたはずだったが、朝日新聞社が引っぱったので、さつと東大をやめてしまった。漱石が反国家主義者、危険思想家だったとすれば、朝日は引っぱらなかつたかも知れないが、漱石は「入社の際」を書き「新聞が商売である如く大学も商売である。新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業しているのと、御上で御営業になるのとの差だけである。」つまり、アカデミーが高尚で、ジャーナリズムが下品だなどということはない、両者は似たりよつたりだという意見をのべている。朝日新聞社は「米塩の資に窮せぬ位の給料をく

れる。」教師を「やめた翌日から急に背中が軽くなって、肺臓に未曾有の多量の空気が這入って来た。」とも書いている。

戸坂は「米塩の資」にかんしては漱石とくらべてみてかなり不安定であったが、京大アカデミーの任人であることをあきらめて、東京へ移り、法政大学の講師になったものの、ながつづきしそうな気配はなく、事実、三年後には「思想不穩のかどで免職になる。」上京直後に発表した論文「アカデミーとジャーナリズム」の中で、彼はまず、アカデミーとジャーナリズムとの「冷淡な関係」についてのべ、日本ではこれまで「アカデミーにとってはジャーナリズムが問題でなく、ジャーナリズムにとつてはアカデミーが問題でなかった」ことを認めている。

京大哲学科には現代哲学の講義はなく、史学科には現代史の講義はなく、文学科にはドイツ現代文学の特殊講義をする助教授（わたしの恩師）はいたが、これは例外であった。学生は、現代哲学、現代史、現代文学をテーマにして卒業論文を書くことは原則として認められていなかった。（ドイツ文学専攻生はトーマス・マン、ヘルマン・ヘッセ、プロレタリア詩人ヨハネス・ベツヒャーなどすべて許可されたが、今思い出してみると不思議な気もする。国文学史の講義は、二葉亭四迷の手前で終了した。二葉亭とともに日本の近代文学ははじまる、大学（アカデミー）は近現代を扱う場所ではないという固定観念が支配していたのである。

エピソードを一つだけつけ加えよう。京大哲学科倫理学の助

教授であった和辻哲郎が、一九二八（昭和三）年の九月、ドイツ留学をおえて帰朝し、久しぶりに講義をすることが掲示によって学生に知らされた。和辻は『日本古代文化』、『古寺巡礼』などの著書によって名声が高かったし、ワイマル共和国のなまなましい現実、革命がいつ勃発するか判らない中での教授や学生や労働者の生活、そういう土産話がきけると思ったのか、和辻助教授がドイツの階級闘争をどんな目で見ていたかが知りたかったのか、学生は教室にあふれ、小教室から中教室へ、中教室から大教室へと、場所は二度も変更された。しかし和辻助教授は学生たちの期待を裏切って「風土論」の話を始め、「風土論」で話はおわった。大学は、なまなましい現代については語らない場所であることを、わたしはいやというほど思いしらされた。

学生が現代に強い関心をもつという点では戦前も戦後も同じであった。戦後の学生は現代史、現代哲学、現代文学をテーマとして卒論を書きたいと主張し、教授は譲歩しはじめた。学生の頭数は目立って多くなり、大学のキャンパスはざわついてきた。威厳と静寂さをそなえたアカデミーは、もはやどこにも見出だせなくなった。アカデミーがジャーナリズムの反対物であることをやめはじめたときに、戸坂は論文「アカデミーとジャーナリズム」を執筆したのであって、このテーマは彼の生活体験から生まれ出たものであった。

ドイツの新聞学・新聞論は敗戦後衰えをみせはじめ、西ドイ

ツでは、新聞・放送・映画・演説（レトリック）の総合的研究をめざすプブリチステイクが、はなばなしいとまでは言えないにしても発展をつづけている。プブリチステイクの訳語としての公示学は最低であり、公報学も適当ではない。広報学の方がまだしもである。東ドイツでは、ジュルナリスティク（ジャーナリズム学）の活動がつづいているが、社会主義国の新聞・放送・雑誌の学問的研究が精力的に行なわれるようになるとは予想できない。

一九三五（昭和一〇）年に刊行された小山栄三の『新聞学』（三海堂刊）、四七年（昭和二二）年に東京堂から刊行された小野秀雄の『新聞原論』は、いずれもドイツの新聞学、ドイツの新聞学者によりかかること大であったが、日本は何分にもマスコミ大国なのであるから、ドイツの学者の研究がどうであろうと、アメリカの状況がどうであろうと、日本人の力でジャーナリズム、マス・コミュニケーションの学問的研究を推進せねばならないのではないか。ドイツ風の新聞学が、科学としてのいさいを整えるのは絶望に近いが、ジャーナリズムの科学、マス・コミュニケーション、プブリチステイクの科学をめざしての努力は、ちよつとやそつとでは成功しないことを覚悟の上で、新聞学会員が力を合わせねばならないと思う。

戸坂も、アカデミーとジャーナリズムのちがいを説くだけで、ジャーナリズム論の学問的体系を志さなかった。「いわゆる新聞学——そういう科学が必要であるか、存在するかはどう

でもいいとして——」戸坂はかつてそんな放言を「新聞の問題」(一九三二年)の中でしたこともある。新聞学、ジャーナリズム学、マス・コミュニケーション学、広報学の苦しさは、やはり現代を学の対象としなければならぬところにあるのであろう。

## 5、むすび

日本新聞学会は一九八三年六月に、松山商科大学で春季大会を開催した。そのとき会員山田宗睦は「ジャーナリズムとしてのテレビ」という題名のもとに問題提起を行なった。

山田の語った内容はそのまま『新聞学評論』第33号(一五二ページから一五六ページ)に掲載されているので、そこに提起されている問題についての私見をのべ、この小論を締めくくることにする。

物事や事件をたんに報道するだけではなく、批判し論評する契機を内包していなければジャーナリズムの名に値いしない、という説を会員山本明は「放送ジャーナリズムの要件」という論文のなかでのべており、山田宗睦はこれを引用しながら、長谷川如是閑、戸坂潤のような「男性的な評論家が主張なされた堂々たる論争」の日本的系譜を認め、山本明もまたその系譜にぞくするという判断をくだした。

新聞ジャーナリズム、放送ジャーナリズムの評論家のなかには、報道第一主義者もいるであろうし言論第一主義者もいるであろう。わたし自身にかんしては、報道第一、解説第二、評論

第三という非男性的立場に立っており、言論第一、評論・批判第一の立場には立っていない。山本明は「たんなる報道」だけではジャーナリズムの名に値いしない、と言っているのであるから、言論第一主義者、もしくは言論主義者のレッテルをはっていかどうか、にわかに決めがたい。この小論のはじめに取りあげた『講座・現代ジャーナリズム』の編集代表城戸又一は、第一巻「歴史篇」でい談のなかで、新聞の言論性を大切なものと見なし、次のようにのべているのであるから、如是閑の系譜にぞくしていることは明白である。

「それがだんだん言論性よりも報道性、つまり不偏不党、中立の商業性のほうが強くなるにしたがって、カンカンガクガクの言論ではもうからないということが非常に大きな支配的な意味をもってしまう。」

山田宗睦の新聞学会での問題提起のあと、予め指定されていた三人の討論者のうちの一人、非会員渡辺茂美(中国放送)は、テレビに登場してもらおうときに、どういうポイントで選ぶか。「りっぱに解説をする人はえらびたくありません。本音をいう人をひっぱりたいと考えています。」とのべた。

テレビ局で働いている渡辺茂美は、りっぱに解説はするけれども、自分の意見、自分の本心を言わない人に対する不満・反感を表明したのである。その心情は理解できるけれども、Aが中国放送で本音を語り、Bを批判または非難し、Bがそのことにかんして反論の場を要求した場合に、中国放送はBに反論の

場を提供することができるとかを考えてもらいたいとわたしは思う。新聞社であろうと放送局であろうと、メディアの内  
部の人であろうと外部の人であろうと、自己抑制は残念ながら  
必要である。

「問題提起」を依頼されたとき、提起者は自分の意見をはつきり言う前に、「こういう問題が存在しています、皆さん一人ひとり、どう解決したらいいかお考え下さい。わたしにはわたしの考えがありますが、指導者面をして、えらそうな態度で申しあげるとはさし控えます。」という心がけをもつべきである。

これが民主社会のジャーナリストの心がけでなければならぬ。民衆の一人ひとは、確かにどう判断したらいいのか判らない。ゆっくり考える時間もない、そこで偉い人にたよる、福沢先生はこう書いておられる、ということで大先生の意見をとりにいれる。自分の頭で考えない。全国紙の権威、活字の権威にたよる。民衆は昔も今も、もたれかかるのが好きである。しかし考えてみれば、新聞が「社会の木鐸もくどくであった時代、政論新聞の時代は古い時代であった。決して「古きよき時代」ではなかった。あれはデモクラシー以前の時代であった。ジャーナリズムは、語源から考えても、言論第一主義でなければジャーナリズムの名にあたいしないという根拠は全くない。

#### 付記

内外社刊『総合ジャーナリズム講座』のチャーを、このエッセイの中ではジャーと改めました。ご諒承を願います。

## What is Journalism?

Yôichi Wada

The word "journalism" has never been translated into Japanese *kanji*. Today, therefore, we use "*jânarizumu*," written in Japanese *katakana*. Concerning the origin of the word, "*sonohi sonohi shugi*," which means the principle of day, to day may be correct. Taking newspapers into consideration as the most important medium, followed by magazines and publications, *Sôgô Jânarizumu Kôza* (Comprehensive Journalism Series) containing 12 vols was published in 1930-31. It includes some critics who definite journalism as activities of the newspapers and magazine community. On the the other hand, some recognize broadcasting journalism while others do not, because we use various expressions in Japanese, for example, "he makes his living by journalism."

Consequently, these days, no one any longer tries to translate journalism into Japanese characters. This is no problem. But a number of scholars think, that real journalism should emphasize their critiques, comments and editorial articles. Many also think that principles of impartial reporting belongs to mass communication, but not journalism.

This paper stresses that such ideas are historically unsupported.

## Journalism in the Soviet Union

Yoshitomo Watanabe

This article examines Soviet Journalism under four aspects ; namely, the concept of news, the functions and principles of news, and freedom of speech.

Through content analysis of newspapers and the definition of news, it becomes clear that "news" in the Soviet Union is goal-oriented